

# 宮の本

長野県佐久町宮の本遺跡発掘調査報告書

長野県南佐久郡佐久町  
佐久町教育委員会

佐久町教育委員会

1979





## 序にかえて

佐久町教育委員会

教育長 高橋綱雄

佐久町大字高野町字宮の本は、佐久町のほぼ中心で、北沢川が千曲川に合流する地点より、西方約1km学校裏遺跡に包括され、古くより遺物の種類・数量が豊富なことで知られています。

たまたま、この地を宅地化する計画が起きましたので、緊急発掘調査をすることに致しました。

調査は、佐久考古学会の井出正義先生を団長に、同会の会員の方と、佐久町文化財調査員の方々に調査員をお願いし、作業のお手伝いを町の有志の方及び、町内各小・中学校の先生方及び、児童・生徒の皆さんにお願い致しました。これらの皆さんのご協力により、多くの成果を挙げることができました。

この結果により、郷土の歴史の一端が、私達の前に展けるという歓びと同時に、この結果を末長く後世に伝える重責を痛感するものであります。

また、調査に関しましては、佐久考古学会事務局長木内捷氏、県教委関孝一・臼田武正両指導主事の先生方にご指導を賜り深謝申し上げる次第です。

終りに、この調査の実施に際し、絶大なご協力をいただいた地主さん及び、施工者さんにお礼佐久市教育委員会の多大なる御配慮に感謝申し上げまして一言のご挨拶といたします。

## 例　　言

- 1 本書は、昭和53年11月14日～11月26日までにわたって発掘調査された、長野県南佐久郡佐久町大字高野町字宮の本に所在する宮の本遺跡の調査報告書である。
- 2 本調査は、佐久町教育委員会が実施した。
- 3 本調査は、井出正義を発掘担当者とし、佐久町埋蔵文化財基本調査団と佐久考古学会有志によって調査団を結成し、佐久中学校郷土史クラブ、佐久西小学校、佐久中央小学校の職員生徒、児童の方々の協力を得て実施した。また、遺物整理には、佐久町陶芸教室、書道同好会の方々が協力された。
- 4 本書に挿入した遺構の実測図作成は、調査団のそれぞれの関係者が行なった。遺物の実測図作成は、井出正義、三石延雄が行ない、トレスを島田恵子が主に担当して行なった。尚、石器実測、トレスは林 幸彦が行なった。
- 5 本書に掲載した写真は、林 幸彦が撮影したものを使用した。
- 6 本書の執筆は、発掘および整理担当者が行ない、文末にそれぞれ文責を記した。
- 7 本書の編集は、林 幸彦が行ない、井出正義がこれを校閲、監修した。
- 8 本遺跡の資料は、佐久町教育委員会の責任下に保管されている。

また、佐久考古学会事務局長木内 捷、佐久考古学会員臼田 武正氏からは、報告書作成に關しいろいろ御助言をいただいた。また、長野県教育委員会、関孝一指導主事には、調査に関し適切な御指導をいただき、更に地元の方々からは、物心両面にわたる御援助を賜わり厚く御礼を申し上げる。

## 凡 例

- 1 検出遺構は次の通りである。  
敷石住居址、配石遺構、土壙—D
- 2 住居址、実測図の縮尺は $\frac{1}{100}$ 、土壙実測図の縮尺は $\frac{1}{50}$ 、炉実測図の縮尺は $\frac{1}{20}$ である。
- 3 土器、石器実測図及び土器拓影の縮尺は $\frac{1}{2}$ である。ただし挿図第14図に限り $\frac{1}{4}$ である。番号に出土遺構、グリッド等を併記した。
- 4 各遺構断面図の水糸レベルは、標高が記してある。
- 5 図版中遺物の縮尺は、土器、石器等すべて約 $\frac{1}{2}$ である。

# 本文目次

序文

例言

凡例

本文目次

付表目次

挿図目次

図版目次

## I 発掘調査の経緯

1 調査に至る動機	1
2 発掘調査の概要	2
3 発掘調査日誌	3

## II 遺跡概観

1 宮の本遺跡附近の地形地質	5
2 周辺遺跡	7
3 宮の本遺跡所在地及び遺跡隣接地について	9

## III 層序

## IV 遺構

1 敷石住居址	12
2 配石遺構	18
3 土壙	22

## V 遺物

1 繩文時代（縄文時代の土器、石器）	26
2 弥生時代（弥生時代の土器）	43
3 平安時代（平安時代の土器、鉄器）	45

## VI 総括

引用参考文献 48

## 付 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表

第2表 土壌一覧表

## 挿 図 目 次

第1図 宮の本遺跡位置図及び発掘区設定図	1
第2図 宮の本遺跡周辺の地質図	6
第3図 周辺遺跡分布図	8
第4図 宮の本遺跡全体層序図	10
第5図 宮の本遺跡遺構全体図	13・14
第5図 敷石住居址実測図	15・16
第7図 敷石住居址炉実測図	18
第8図 配石遺構実測図	19・20
第9図 D 1・2号土壌実測図	22
第10図 D 3号土壌実測図	23
第11図 D 4号土壌実測図	28
第12図 D 5号土壌実測図	24
第13図 D 6号土壌実測図	25
第14図 縄文中期中葉の土器拓影	28
第15図 縄文中期中葉の土器拓影	30
第16図 縄文後期初頭の土器実測図	31
第17図 縄文後期初頭の土器実測図	32
第18図 縄文後期初頭の土器実測図	34
第19図 縄文中期中葉及び後期初頭の土器実測図	35
第20図 縄文後期初頭の土器拓影	38
第21図 縄文後期初頭の土器拓影	38
第22図 縄文後期初頭の土器括実測図	39
第23図 縄文時代の石器及び平安時代の鉄鎌実測図	42
第24図 弥生後期及び平安時代の土器実測図	44

## 図 版 目 次

- 図版一 遺跡遠景写真
- 二 1 宮の本遺跡全景（東方より） 2 宮の本遺跡今景（西方より）
  - 三 1 宮の本遺跡層断面（南方より） 2 全体層序第1層の礫（西方より）
  - 四 1 敷石住居址全景（東方より） 2 敷石住居址全景（北方より）
  - 五 1 敷石住居址炉（上方より） 2 敷石住居址炉の窓掘（上方より）
  - 六 1 敷石住居址北東部の遺物出土状態（南方より）  
2 敷石住居址北東部の遺物出土状態（東方より）
  - 七 1 敷石住居址注口土器出土状態（北方より）  
2 敷石住居址深鉢土器出土状態（上方より）
  - 八 1 配石遺構全景（西方より） 2 配石遺構全景（南方より）  
配石遺構全景（東方より）
  - 九 1 配石階段状組石部（西方より） 2 配石階段状組石部（南方より）
  - 十 1 配石断面（南方より） 2 D 1号土壙全景及びD 2号土壙全景
  - 十一 1 D 3号土壙全景（北方より） 2 D 4・5・6号土壙全景（東南方より）
  - 十二 敷石住居址出土遺物
  - 十三 敷石住居址出土遺物
  - 十四 敷石住居址及び配石遺構出土遺物
  - 十五 敷石住居址及び配石遺構出土遺物
  - 十六 グリッド出土遺物（弥生後期）
  - 十七 繩文中期中葉の土器
  - 十八 1 繩文中期中葉の土器 2 繩文後期初頭の土器  
十九 繩文後期初頭、弥生後期、平安時代の土器
  - 二十 1 敷石住居址、配石遺構出土、表採の石器 2 宮の本遺跡発掘調査スナップ  
二十一 宮の本遺跡発掘調査スナップ  
二十二 宮の本遺跡発掘調査スナップ

## I 発掘調査の経緯

### 1 調査に至る動機

佐久町大字高野町字宮の本は、佐久町中央部の平坦地高野町地区の西北を画する台地上にある。この台地の基部には、「南佐久郡の考古学的調査」（八幡一郎著）に「和田上（佐久市瀬戸）とならんで本郡遺跡の双壁であろう」と記されている佐久西小学校裏遺跡がある。この遺跡から北東に細長くのびる台地の中央部に宮の本が位置する。

佐久町教育委員会は、昭和53年度に町内埋蔵文化財基本調査を実施中であった。10月17日高野

町北沢地区の調査にあたっていた同調査団は、宮の本地籍に於て、佐久市中込有限会社三和興業が宅地造成中の現場に会した。上記のような立地条件からみて、同地が埋蔵文化財を包蔵する可能性をもつことを考え、工事中の同社職員に注意をよびかけると共に、町文化財調査委員が工事の進行過程を見守ることにした。

11月2日、工事現場を見まわった町文化財調査委員（埋文基本調査団員）が、探土の断面から遺構の一部と思われる鉄平石を発見して、直ちに町教育委員会に通報した。

これが縄文後期の敷石住居址であることを確認した佐久町教育委員会は、直ちに工事の中止を命じ、県文化課と連絡して、緊急発掘調査をすることに決定した。

佐久町埋蔵文化財基本調査団を中心として、佐久考古學会有志の協力を得て、11月14日より、26日に至る間に於て発掘調査を実施した。  
（事務局）

## 2 発掘調査の概要

う～えー5～16、お～すー2～16グリッドはすでに工事中の重機によって地山あるいは地山付近まで削平されている。土層確認トレチをうー5～16グリッドに設け深掘を行う。この際重機によりすでに1m程掘り下げられている所の観察によって遺構の存在はない。南北にも同様なトレチを設け掘り下げを始める。

11月15日(水) 晴れ

土層確認トレチは、擾乱層が約1mと深部まで及んでおり、遺構の存在は可能性がほとんどのなく入力より重機に変更する。

今回の調査の発端となった鉄平石を敷きつめた遺構は、重機により削平された断面に茶褐色の覆土を伴って認められる。プランの追求は、おー3、えー2～4、うー4グリッドにおいて行なう。いー1・3・4グリッドを掘り下げる。きー2～16グリッドに土層確認トレチを設けて、本日より参加した佐久西小の先生、児童が掘り下げを行なう。きー8グリッドより角のある礫群が見えはじめ、出土遺物は縄文及び弥生時代の土器を中心である。

11月16日(木) 晴れ

いー2～4、うー2～4グリッドを掘り下げる。敷石住居址の他に河原石を使用した配石が広い範囲にあるかと思われ、おー5グリッドを掘り下げプランの追求を行なう。敷石住居址はうー2、3グリッドを掘り下げプランを追う。佐久西小学校の児童は引き続き、き列のトレチを掘り下げる。

11月17日(金) 曇のち雨

あー2・3グリッド掘り下げる。その結果あ～おー2～6グリッドにかけた広い範囲の配石が検出され、配石遺構と命名する。敷石住居址と一部重複し、敷石住居址よりも明らかに新しいものであるためにまず配石遺構より掘り下げる。あ・いー2～4グリッド内の配石遺構の写真撮影を行なう。

雨のため午前中で作業中止。

午後、重機によりう列の土層確認トレチの深掘りを行なう。佐久西小の児童は、おー5グリッドの配石遺構の掘り下げを行なった。

11月18日(土) 晴れ

おー2～4、えー3・4グリッドの配石遺構を掘り下げる。佐久西小、佐久中学校郷土史クラブの児童、生徒は、かー6～12グリッド内の大きな落ち込みを追求する。同時に行なったうー5～14グリッド内の東西土層確認トレチの清掃により、かー6～12グリッドの黒色の落ち込みは遺構ではないように思われる。出土する遺物も非常に磨滅している。

配石遺構の平面図作成に入り、あー2・3・いー2～4グリッド内を実測する。

雨上りのためにとてもぬかる。

11月19日(日) 晴れ

えー4・5、おー4・5グリッド内の配石遺構を掘り下げる。かー5～7グリッドの精査の結果、椭円形の落ち込みを数基確認する。あ・いー2グリッドの精査により円形の落ち込み2基を検出し、これを土壤のD1号土壤D2号土壤と命名し、お・かー3グリッド内の土壤をD3号土壤、かー5～7グリッド内の土壤をD4号土壤・D5号土壤・D6号土壤

壇と命名する。東西土層断面図作成及び写真撮影。

佐久西小、佐久中学校郷土史クラブの児童生徒は昨日に引き続き、かー5~12グリッドの掘り下げを行なう。

配石遺構の平面図作成を続行する。

11月20日(月) 晴れ

配石遺構の、いー4・5、うー4・5、おー5グリッド内掘り下げる。佐久西小児童は、かー4~10、きー4~10グリッド掘り下げる。凝灰質角礫岩の上部に接する第Ⅳ層より弥生後期土器等多量に出土している。

配石遺構の平面図作成を続行する。

11月21(火) 晴れ

配石遺構を、えー5・6グリッド内掘り下げる。D 1・2号の掘り下げを行なう。覆土中より若干の土器片が出土する。

配石遺構平面図作成の続行。

敷石住居址及び配石遺構の土層断面図作成。かー5~8グリッド(南北)土層断面作成及び写真撮影。

11月22日(水) 晴れ

配石遺構平面図作成及び配石個々のレベリングを行なう。又、配石遺構の断面図作成。レベリングに先立ち、配石遺構の全体写真の撮影。うー5~6セクション取り除く。

D 3~6号土壠掘り下げる。

佐久中央小学校児童応援。

D 1~3号土壠の平面図及び断面図作成。

配石遺構を取り除き敷石住居址の残存している全ぼうが明らかとなった。

11月23日(木) 晴れ

いー4・5配石遺構の下部精査。えー2・3、かー2・3グリッドにわたる敷石住居址セクションベルトを取り除く。

佐久中学校郷土史クラブの生徒、きー8~11グリッド掘り下げ。''

D 4号土壠平面図及び断面図作成。

D 1~6号土壠写真撮影。

11月24日(金) 曇りのち晴れ

敷石住居址の覆土は、すでに大部分が配石遺構によって削平されているが、各所に僅かではあるが残されている。掘り下げを始める。東方の奥壁部とおもわれるところよりピットが検出され、周辺には土器が多く出土した。石剣もその付近から出土している。出土状態の写真撮影も平行して行なう。

D 6号土壠平面図作成。

午後より佐久町民の方々の公開見学会。

11月25日(土) 晴れ

敷石住居址掘り下げ続行、平行して平面図の作成。炉の検出作業。敷石住居址写真撮影

11月26日(日) 晴れ

敷石住居址平岡図及び断面図作成。炉の切開作業。深さ約30cm、六角形の石囲い炉の内部は焼土が多量に堆積している。

全体図作成し、現場の作業を終了する。

12月 遺物の水洗い及び註記、復元作業。

1月 遺物の実測、図面修正作業、遺物写真撮影。土器拓本。

2月 土器の拓本、遺構・遺物のトレス作業

2月~3月 原稿執筆、割付け、編集、校正

(林 幸彦)

## II 遺跡概観

### 1 宮の本遺跡附近の地形地質

川上村から佐久平に向って北流する千曲川は、佐久町附近に至って川巾を広め流れも緩やかとなり、地域の東西巾も1km内外と広くなってくる。佐久町地域で千曲川に合流する支流には、左岸に双子峯（2223m）の中腹1200m附近を源流とする北沢川と源左衛門附近から発する雲場川が久保田で合流して、更に宿岩において千曲川に注ぐものと、佐口用水から分流した小用水が高野町の水田用水となっている。右岸は十石峠（1351m）から発する抜井川が新三郎北・鎌掛沢を合流して新設された古谷湖に貯水し、大野沢、矢沢を合流し、さらに余地峠（1269m）から流下する余地川を合せて四ツ谷に於て千曲川に流入している。

佐久町は、中央を流れる千曲川を境にして地形地質とともに時代成因大差をもっている。即ち西側は諏訪郡と境する新しい北八ヶ岳火山の一連の火山嶺枯山・横岳・大岳・双子峯等、何れも二千米を越す火山裾野が遠く長く15km以上ゆるい傾斜で続いており、浸蝕も進んでおらず幼年期のおとなしい地形をつくっている。

これに反して東側は、秩父古生層を基盤とした山地で群馬県境から15kmとほぼ等距離であるのに時代差と地質岩石の違いから谷の浸蝕は深く急流で谷底蛇行浸蝕まで進んで溌壯年的地形を作っている。

これらを地質学的に見ると西の北八ヶ岳火山は新生代第三紀ホッサマグナ（日本中部地溝帯）内に出来た新しい火山で、初期には泥流、火山集塊岩を大規模に流出して火山の基盤を作り、その上部に各火山の火口から多量の溶岩を數十回も噴出して現在の二千米を越す山態を作り、その後も噴火を長くつづけ多量の火山灰砂を厚く堆積している。これが西山の赤土（赤粘土・ローム）である。これが現在の堆積で見られる下部から泥流、集塊岩・各種溶岩流（安山岩）最上部火山灰層となっているのである。東側は地質時代の最も古い古生代、日本列島は殆ど深海底であった時代の堆積物、いわゆる秩父古生層で構成され岩石はチャート、硬砂岩、粘板岩、輝縞凝灰岩、石灰岩が主となっている。地殻運動隆起によって日本列島が現在に至るまでは、長い地質時代を経てきているわけである。

佐久町高野町附近はさきに述べた東西区分の境界附近にあたり、千曲川がそこを流れ、時には北の荒船火山噴出物により、又、八ヶ岳火山の噴出物にせき止められ何回かの陸水湖を作った。、



第2図 宮の本遺跡周辺の地質図 (1:25,000)

その証拠に、烟ヶ中や下畠の断崖に見られる地層は水平層を何回か繰り返している。

これらはすべて新生代第四紀洪積世の大氷河期の堆積物で三本木団地の丘と花岡部落の面まで2~30mの厚さにつづく大盆地を構成した。その上部へ火山灰層が1~1.5mの厚さに堆積した。その後、沖積紀に入って更に大地が隆起し降水量が減じ現在の沖積平地を作り千曲川の流路を決定した。

宮の本遺跡では黒色表土10~20cm、その下部に浮石と角閃石結晶を含む赤褐色ローム層が1~1.5mの空中堆積のあとを示し、さらに下部には円礫を含む凝灰質集塊岩層が基盤をなしていて上記の堆積状況を示している。

#### 〔附 記〕

①敷石住居址の敷石は、佐久町余地の板石山産輝石安山岩の板状節理を利用したものである。

②配石造構の礫は全て円礫で岩質からも千曲川河床礫であることが確認された。

(白倉 盛男)

## 2 周 辺 遺 跡

佐久町は、中央部を千曲川が貫流し、東方から抜井川がそれに合流している。この合流点附近から南方には千曲川をはさんで、東西に典型的な河岸段丘が発達している。佐久町の主要遺跡はこの東西の段丘面に集中している。特に川東の館遺跡と川西の佐久西小学校裏遺跡は南佐久郡内屈指の大遺跡として古くから知られている。<sup>1</sup> 両者とも縄文中期以降、弥生、古墳時代が複合して豊富、かつ多様な遺物を出土している。<sup>2</sup>

川西の中原遺跡は信濃最古の弥生式土器として知られる弥生中期の壺を出土していて、全県的にも注目されている<sup>2</sup>。

今回緊急発掘調査の行なわれた宮の本遺跡は、佐久西小学校裏遺跡から北東にのびる細長い台地上に位置し、その北には北沢川の狭い底地を隔てて、北沢遺跡と南北に対応している。

北沢遺跡は縄文前期から古墳時代にわたる遺物を出土しているが、ここには塚畠古墳がある。この古墳は佐久地方に於ける南限の古墳として重要である。

また、佐久西小学校裏遺跡は弥生後期の箱清水式土器を出土し、<sup>2</sup> 南佐久郡に於ける弥生後期の遺跡としては、やはり南限的な意味をもつ遺跡と考えられ、この附近が佐久地方に於ける古代稻作の南限としての重要な位置をもつものと思われる。今回の宮の本遺跡の調査でも、弥生後期の大型の壺と高环を出土しているのが注目される<sup>2</sup>。

宮の本遺跡の敷石住居址や配石造構と同時代の縄文後期の遺跡としては、佐久西小学校裏遺跡から堀之内式土器を出土している。館（大落沢を含む）遺跡からは堀之内、加曾利Bのほか、晩期の佐野・冰式の土器を出土し、耳栓、滑車形、臼形の各種耳飾、土偶、石劍、石棒、独钻石など多彩な遺物が知られている。

敷石の材料の鉄平石は、同町余地に豊富に産し、現在もその採掘が行なわれている。

宮の本遺跡の西方、北沢川に沿って蓼科山麓へ約6～8km、標高1000mまでの間には、土師器（須恵器、灰釉を含む）を出土する遺跡が10ヶ所点在し、その間に縄文前期の黒浜、諸磯式土器を出土する遺跡が3ヶ所みられる。<sup>3</sup>

このように宮の本遺跡をめぐる周辺は、佐久平の平垣部と南佐久南部の山間部との接点としてその谷口を扼する位置を占め、考古学上たくさんの問題点を秘めた注目すべき地域である。

(井出 正義)

註1 八幡一郎 昭和3年 「南佐久郡の考古学的調査」

註2 信濃史料刊行会編「信濃史料」第一巻上・下

註3 佐久町教育委員会「佐久町埋蔵文化財基本調査中間報告」



第3図 周辺遺跡分布図 (1:25000)

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	立地	時代		備考
				縄弥	古歴	
1	宮の本	佐久町高野町宮本	台地	○○	○○	S 53. 11月発掘調査
2	佐久西小学校裏	タタタ	タ	○○	○	佐久西小学校三木本木團地付近 一帯が遺跡
3	小山寺窪	タタ寺窪	タ		○○	小山山津金寺廐寺跡、宝鏡印 印塔、五輪塔等多數出土
4	与市窪	タ宿岩与市窪	タ		○	
5	塚畠古墳	タ高野町城陰	タ		○	佐久地方南限の古墳
6	北沢	タタ北沢	タ	○○	○	口縁部縁紺糸切皿出土
7	北沢大石棒	タタタ	タ	○		日本一の巨大石棒
8	雁明	タタ雁明	タ	○	○	
9	仲田	タ上区仲田	タ	○	○	
10	千手院地内	タ平林	タ	○	○○	五輪塔出土
11	下原	タ海瀬下原	タ	○		
12	上原	タタ上原	タ	○	○	
13	中原	タタ中原	タ	○○	○	弥生中期壺2を出土

### 3 宮の本遺跡所在地及び遺跡隣接地について

宮の本遺跡は、高野町字宮の本1138番地で、地目は現在水田で面積16アール余の広さを持つ一枚田の北隅に位置している。

当該水田に隣接する東北東側は、村社諏訪神社境内であり、西南西側は八幡神社境内に隣接して居り、発見された遺跡はこの二社にはさまれたかたちになっている。

#### 1. 敷石住居址、配石遺構、土壙の所在する水田について

当該水田が開発された年代は不詳であるが、この水田に使用される灌漑用水の水路は明治11年には既に使用されているので開田されたのはこれ以前であるといえる。（明治11年編集の高野町村誌には、宮裏堰とあり全長四百九拾三間三尺、灌漑面積一丁一反二十四歩と印されている）

#### 2. 諏訪神社（村社）（明神様）

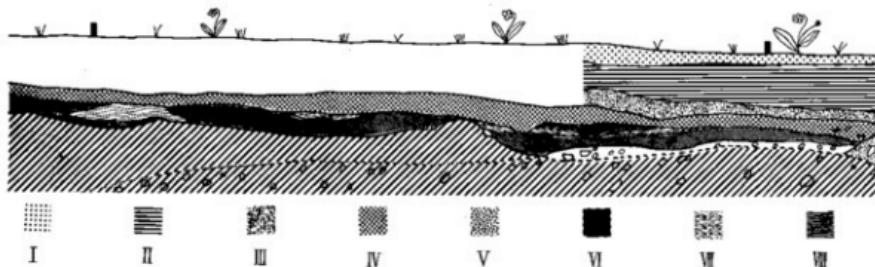
祭神は、健御名方命・素戔鳴命・熊野大神で創建されたのは元和二年である。

#### 3. 八幡神社

祭神は、仲哀天皇・応神天皇・神功皇后である。

創建年代は不詳であるが、右の諏訪神社創建と同時代と考えてよいと思われる。（両社境内の樹木の大きさはほとんど同じであると見られる）

（倉沢 元久）



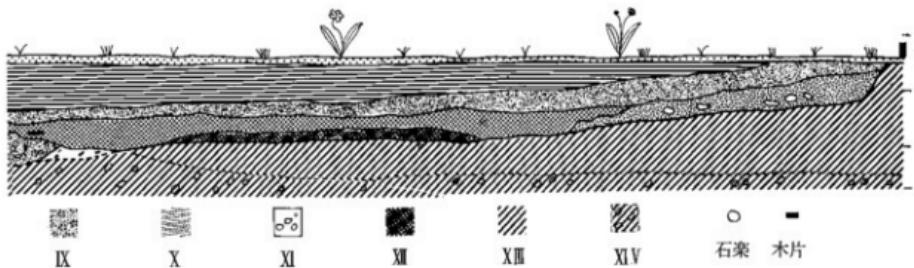
第4図 宮の本遺跡全体

千曲川と北沢川に挟まれた北東に伸びる台地は、佐久西小学校より漸次低くなるが、八幡神社と諏訪神社の間には凹地があり、そこに宮の本遺跡が所在する。北沢川の浸蝕、開田事業等の要因があり層序は単純ではない。第4図は遺跡の東西層序を表わしたものである。

第I層は水田の耕作土で、東側ではローム層を削平し、西側は客土をして平坦なものにしている。第II・III層の層厚は東にむけて薄くなり4-ラグリッド内で消滅する。地山となるローム層も同グリッドにて段をなし高くなっている。第II層は明らかに人為的なものであり、開田に際して当時の地表面の低い所に客土されたものと思われる。第V層は配石造構の覆土であり敷石住居址との裏複部では敷石住居址覆土の直上に堆積している。第IV層は若干の弥生土器片を包含し、埋木が多くみられる。第VI・VII層は小石を多く含み、ロームブロックもみられ全体に砂質っぽい。第VII層は磨滅した弥生後期土器片を多量に含んでいる。第IX・XI層に含まれる角礫は、凝灰質角礫岩でありこの台地の基盤となっている層の一部である。第VII層は砂質に富んでいる。

以上の層序から本遺跡の地表面の堆積は、まず諏訪神社よりのやや高位に敷石住居址が営まれ、その後配石造構が存在し、そのあと第VI・VII層は少くとも水田の開田以前の畑が存在する前に、北沢川に向けて移動した土砂によって、形成されたとおもわれる。第VII層に包含されている弥生土器片は非常に磨滅しており、八幡神社から佐久西小学校にかけては、縄文、弥生、古墳時代等の大規模な遺跡が存在し、その方面から的小規模な土砂の移動も推定されよう。第XI層もその際に第VII・第VIII層が影響を受けたものと思われる。第IV層にみられる埋木は、範囲が限定され他所より湿気の強い所（全体的な層序から最も沢地の性格強いところ）にある。第III層の後は、少くとも明治11年の開田の際（前章記述）にはほぼ平坦な面を人為的に形成されている。深いところでは1mもあり相当の労力を要したものと思われる。

（林 幸彦）



層序図 (1:100)

層序説明

- 第Ⅰ層 灰褐色。現在の水田耕作土、下部4cmは床土で赤褐色を呈す。
- 第Ⅱ層 黄、茶褐色、開田の際の客土、ロームブロックと茶褐色土が交互に斜めにうかがえ、一部には両者が混合しており明らかに人為的堆積である。
- 第Ⅲ層 灰褐色。開田以前の耕作土と思われる。I層より黒色が強く、小石若干含み粒子細かい。
- 第Ⅳ層 黒色。粒子細かく粘性弱い、小石を含む。ロームブロック含む。埋木を多く包含する。
- 第Ⅴ層 茶褐色。配石造構の覆土、細分するとさらに2層に分たれる。焼土、炭化粒子、ロームブロック含む。
- 第Ⅵ層 茶褐色、粒子細かく粘性があり、小石等は含まれない。
- 第Ⅶ層 茶褐色。粒子粗く粘性は弱い。小石を多量に含む。
- 第Ⅷ層 黑褐色。小石多く含む (IV層より多い)。ロームブロック、バミスを含む。磨滅した弥生後期土器片を多量に包含する。
- 第Ⅸ層 黒色。20~30cmの礫を含む。
- 第Ⅹ層 黑褐色。Ⅷ層に近似する。
- 第Ⅺ層 黑褐色。1辺5cm~20cmの角石、40cm×50cm×10cmの平な石を多量に含む。これらは凝灰岩質集塊岩である。砂質に富む。
- 第Ⅻ層 黄茶褐色。ローム層の漸移層。粒子細かく粘性強い。
- 第Ⅼ層 黄色ローム層 造物を包含しておらず本遺跡の地山となる層。
- 第Ⅽ層 凝灰岩質集塊岩礫層 本遺跡の所在する台地の基盤をなす層。

## IV 遺構

調査は設定した 150 グリッドのうち 56 グリッド（約 425m<sup>2</sup>）についてなされた。その結果、敷石住居址 1 軒、配石遺構 1 基、土壙 6 基が検出された。

敷石住居址は第Ⅳ層上面及び第Ⅴ層下面において、D-1・6・2 号土壙は第Ⅲ層下面において、D-3・4・5 号土壙は第Ⅴ層下面においてそれぞれ確認された。

敷石住居址は縄文時代後期初頭に、D-1 号土壙は平安時代に比定される。他は明確な時期決定をなし得ていない。配石遺構は、敷石住居址の覆土形成状況等から、敷石住居址より後に配石されたものであり、少なくとも開田以前の耕作より以前のものと考えられよう。

また、明治の初めかあるいは江戸時代の開田であろう水田の盛土状況もとらえることができた。当時の開田事業の大きな労力がうかがえよう。

### 1) 敷石住居址（第 6・7 図、図版四～七）

本遺構は 2-4-1 ～ 6 グリッドに位置し、全体層序の第Ⅳ層上面において確認された。東部を僅かに残し他は配石遺構に覆われておらず、南部はほとんど配石遺構によって崩されている。また、本遺跡の発掘調査の契機となった敷石の露呈した部分は、南東部にあたりすでに重機によつて破壊されている。残された平面プランは、炉址より北側壁中央部まで 380 cm（長径）、炉址より東側壁中央部までは 280 cm（短径）を測り、西側部の敷石残存部の形状からも南北に長軸をもつ橢円形を呈すものと考えられよう。約半分が崩されあるいは破壊されているために平面プランの変化（柄鏡形等）の有無は不明である。本遺構は、東方の源訪神社から傾斜する地形が、段をなして凹地に移行するきわにあるために遺構東部はローム層を掘り込んであるが、炉址より西は黒色土とロームブロックの混合土を低い部に盛って平坦な面として、その土に鉄平石（輝石安山岩）<sup>1</sup>を敷きつめてある。

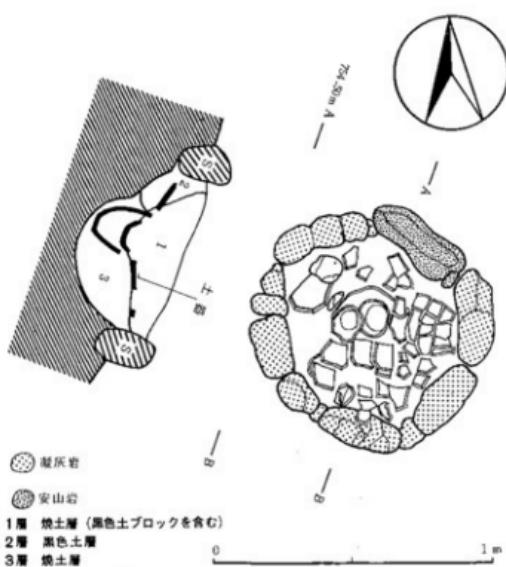
覆土は 3 層で形成されており、第 3・4 層は全体層序第Ⅴ層の配石遺構の覆土であり、炉の南東部 200 cm の範囲は敷石面にもっとも近くせまっている。第 5 層は黄褐色を呈し、粒子・粘性色調が第Ⅲ層のローム層に近似する。炭化粒子を含んでいる。

遺構の北部から東部は掘り込んで構築されていることがうかがえ、確認面からの壁高は 10 cm を測る。壁高のもっとも深い部分は、東側壁部の削平部際で 25 cm を計測する。炉址より半径 160 cm

より壁にむけて約100cmの中で鉄平石（輝石安山岩）が敷きつめられている。一辺が40~50cmの多角形を呈す鉄平石がほとんどであり、長軸が100cmを越すものが7枚もある。厚さは均一で4~5cmを測る。鉄平石の性質上多くの敷石が割れている。これらの大きな鉄平石のまわりには、小さな鉄平石が敷かれている。そして、鉄平石に接して土中に一部を埋め込んだ径10cm程の河原石が存在する。この河原石は敷かれた鉄平石がずれないように固定する役目を持つものと思われる。特に外周部に多くみられる。敷石はほとんど同一レベルでなされているが、西側に一枚残っている鉄平石は10cmほど低い位置にある。この部分にあっては特異な構築のされたをしている。60cm×50cmの長方形の鉄平石を平らに置き、その東側に接してもう一枚の60cm×30cmの長方形の鉄平石を垂直に配してある。前述したように南部より西部にかけては、配石遺構によって崩されているが、東部の敷石の一部は配石遺構に使用されている河原石によって細かく破られている。これは後述する配石遺構が構築される際による人工的破壊と思われる。

炉址は、本遺構が楕円形を呈すものならほぼ中央に位置しているといえよう。角ばった凝灰質角礫岩を大5個、小4個、安山岩質の河原石を1個用いて概正六角形を呈し、規模は礫の外縁~外縁で90cm、深さ40cmを測る石囲い炉である。凝灰質角礫岩は35~40cm×10~15mm、安山岩は40×15cmを測る。石囲い内には土器が埋められて、内部には焼土がぎっしり堆積しており、炉の中央で炉最深部より15cmほど上に土器底部が置かれ、同一個体の土器の口辺部から胴下部の破片（第17図2）がすべて内面を上にむけて敷きつめられている。この土器底部上に接して別の土器底部（第18図1）がやはり内面を上にして置かれている。これらの土器底部及び土器片を境にして焼土が上下に区分され、下部の焼土は真赤、上部の焼土には黒色土が混っている。上下層とともに炭化粒子を含む。さらに、それらの土器の下位には胴部~底部が残存する土器（第17図1）が埋められ、土器の内部には周囲と同様に焼土が堆積している。この土器は、上述のものと異なって長時間熱を受けたと思われ非常にもろく、特に外面が顕著である。このような状況は、まず下位の埋甕炉が一時期使用された後に上位の埋甕炉が使用されたと考えられよう。上、下位の埋甕炉と石囲い炉との使用された時間的関係は不明であるが、その時間的順序は一応次の3通りの時間的組み合わせが考えられる。まず石囲い炉→石囲い・下位埋甕炉、次に下位埋甕炉→石囲い・下位埋甕炉→石囲い・上位埋甕炉、そして石囲い・下位埋甕炉→石囲い・上位埋甕炉となる。以上の組み合わせは同一住居址内の炉址の構造的变化ととらえている。（本敷石住居址と他の住居址との重複関係は、同一レベルにおいても敷石の下部においても明らかに存在しない。）

ピットは、本遺構の北側部と東側部において検出された。P<sub>1</sub>は80cm×70cmの楕円形を呈し、深さは敷石上面より30cmを測る。P<sub>2</sub>は100cm×60cmのやや不整な楕円形で深さは敷石上面より15cmを測る。いづれも敷石よりはずれた位置にある。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>とも主柱穴としての機能をもったものであろう。敷石下部からは検出されなかった。



第7図 敷石住居址炉実測図(1:20)

遺物は床面直上及び覆土より縄文後期初頭の土器、石器が出土した。実測可能な土器は、炉址内の深鉢形土器（第17図1・2、第18図1）の3点の他に、7点の（うち2点は底部）深鉢形土器（第14図1・2、15図1・2、第18図3・4・9）、浅鉢形土器1点（第16図6）、注口土器4点（第16図1・5、第18図2）があり堀ノ内I式に比定されよう。石器は石剣1点、打製石斧1点（第20図1）、用途不明石器2点（第20図11・12）がそれぞれ床面直上より出土している。

（林 幸彦 井出 正義）

註1 鉄平石（輝石安山岩）は、本遺跡の東方6km以上の距離にある佐久町余地に産出するものである。鉄平石の重さは、最も大きなもので一枚60kg以上もあり、人力による運搬にはたいへんな労力があったと思われる。

## 2 配石造構（第18図、図版八・九・十の1）

本造構は、あー3、いー3~5、うー3~6、えー2~7、おー2~6グリッドより検出された。当初重機によって露呈した河原石が散在していたにすぎなかった。ところが、土層観察トレントチに多量の礫が確認され、平面的に追求すると敷石住居址との重複関係が認められた。土層断面の状況は明らかにこれらの礫群が新しい。

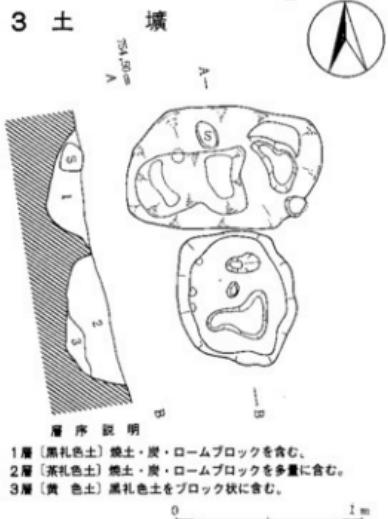
敷石住居址覆土及び第Ⅲ層（ローム層）を掘り込んで構築されている。掘り込みは、いーえー3グリッドの第Ⅲ層を約20~60cm掘り下げる、底面は西方にかけて比較的緩く傾斜している。敷石住居址との重複部分では、敷石住居址東側部の壁より50~70cmを残し、掘り込みは敷石面まで及んでおらず深さは約30cmである。したがって、底面は平坦面をなし、敷石の西縁より比較的急斜をもつて西方に傾斜している。

り、第16図2・3・4の手捏ね様の土器もこの位置から出土した。また、第19図1・2の弥生後期の壺・高环形土器がいー4グリッドの本遺構が崩れたと思われる下部より出土した。うー4グリッドの上部覆土からは、第16図6の国分期の高台付壺が検出されている。石器は、打製石斧4点（第20図2・3・5・6）、加工痕があるフレイクが1点（第20図8）、横刃形石器1点（第20図4）がそれぞれうーおー3・4グリッドより出土した。鉄鎌（第20図13）は、あー3グリッドの覆土上部より検出された。

これらの遺物は、縄文中期、後期、弥生後期、国分期と多様な時期に属するものであり、敷石住居址との重複もあり一概には本遺構との関連性をいいえない。出土状態も礫の覆土上部から鉄鎌、土師器が出土したり、いーえー3・4グリッドに縄文中期中葉の土器片が集中したり、配石下部から弥生後期土器が出土して、本遺構に帰属する遺物は明らかにしがたい。だが、明らかに本遺構は、敷石住居址より後出するものであり、いーえー3・4グリッドを中心とした縄文中期中葉の土器群が帰属する遺構を崩壊せしめている可能性がある。（林 幸彦 井出 正義）

註1 すでに採土により取り去られたものがあり、プランの推定が正しければ約700~1000個にものぼる量と思われる。

### 3 土 壤



第9図 D 1, 2号土壤実測図 (1:30)

D 1号、D 2号土壤（第9図、図版十の2）  
本遺構は、調査区の北西端に位置するあ  
いー2グリッドより、2基が連なった状態で  
検出された。

D 1号土壤の平面プランは、東西に拡がっ  
た楕円形を呈し、長径105cm、短径65cmを測  
る。主軸方位はN-87°-Eを示し、確認面か  
らの深さは20cmと浅く、壁は比較的急な傾斜  
をもって立ち上がり、壁に続いてテラスが東  
西二カ所に存在し、底面は凹凸のはげしい複  
雑な様相を呈する。覆土は、燃土、炭化粒子、  
ロームブロックを少量含んだ黒褐色土によっ  
て形成されている。

D 2号土壤の平面プランは、長径70cm、短  
径65cmでやや南北に長い不整形を呈し、主

覆土は2層で形成されており、礫群は下部覆土内乃至は上面にある。覆土2層は、炭化粒子及びロームブロックを含んでいる。

本遺構出土の礫は約500個を数える<sup>1</sup>。これらはほとんどが河原石であり角はほとんどなく円礫が用いられている。割れているものも数個ある、また、敷石住居址に使用された鉄平石もみられるが、石質は主として千曲川の河床に存する安山岩である。本遺跡のある台地上や北沢にはこれらの礫の露頭はみられず、東方に流れる千曲川より運搬されてきたものと考えられる。長径が50~80cmもある重い礫が多数あり、100cmを測る巨大なものも1個ある。仮に入力によって運搬したとすると想像を絶する労力と思われる。

礫は13m×12mの範囲から出土しており、特に内側の半径3m、外側の半径5mのドーナツを半割にした平面プランを呈す範囲に原初の主体があったと思われるが、すでに相当な規模で崩壊している。半円の弧の中央には幅約30cm南北の長さ2mの直線的に配列された部分があり、同様なものが西方から東方に段をなしており3段が確認された。この段の両側（北側、南側）には真直に西方から東方に急角度で立ち上がる直列に配された石組がある。これらの礫の配置・配列は明らかに入為的な意図が働いたものと思われ、自然的な礫の移動とはとらえがたい。この階段状から東方には掘り込み面が認められるが礫は検出されていない。また、階段状の北側には斜面にずり落ちた状態と思われる100cm×50cmの大石がある。これらの礫を垂直的に見た場合、敷石面及び第1層とは約10~30cmの間があり接してはいない。（一部のみ敷石面と接しているが。）斜面の礫は下方から順次配置されたかのように積み重ねられている。

D-3号土壤の上面にも礫が存在していたと思われるが、すでに重機によって取り去られており本遺構との関連は不明である。

以上のように、これらの礫群はドーナツの半割状プランの中心を最高位に、西方に階段状の石組をもち、垂直的には円錐合形を呈し、何らかの意図をもって配石された配石遺構と思われる。中心部は開田の時に削平されている可能性が強く、検出された本遺構の状況は原初の姿とはだいぶ変容しているものと思われよう。本遺構は配石の状況と多大な労力を払って運搬された礫（河原石）を考え合わせると、特殊な用途、機能を有していたものと思われる。

敷石住居址との時間的な関係は、当初敷石が配石遺構を構成する河原石と接していたためあまり離りはないように思われたが、調査の結果敷石住居址の覆土が約30cmほど形成された後に配石遺構が構築されたことが判明した。

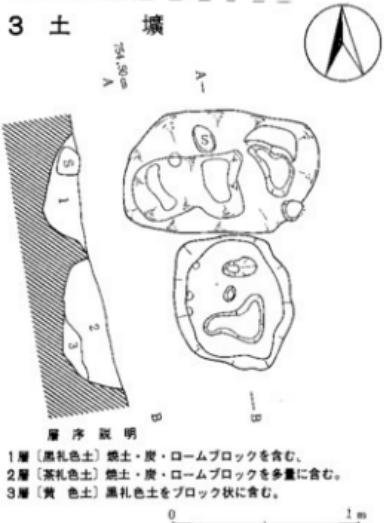
遺物は、多量の土器と石器が出土している。しかし、多くは小さな土器片であって図示でき得たものは少ない。

縄文中期中葉の土器破片は、主にいー3・4、うー4、えー3・4グリッドより出土しており、縄文後期初頭の土器及び土器破片は、敷石住居址との重複部にあたるえ・おー3・4グリッドよ

り、第16図2・3・4の手捏ね様の土器もこの位置から出土した。また、第19図1・2の弥生後期の壺・高环形土器がいー4グリッドの本遺構が崩れたと思われる下部より出土した。うー4グリッドの上部覆土からは、第16図6の国分期の高台付坏が検出されている。石器は、打製石斧4点（第20図2・3・5・6）、加工痕があるフレイクが1点（第20図8）、横刃形石器1点（第20図4）がそれぞれうーおー3・4グリッドより出土した。鉄鎌（第20図13）は、あー3グリッドの覆土上部より検出された。

これらの遺物は、縄文中期、後期、弥生後期、國分期と多様な時期に属するものであり、敷石住居址との重複もあり一概には本遺構との関連性をいいえない。出土状態も礎の覆土上部から鉄鎌、土師器が出土したり、いーえー3・4グリッドに縄文中期中葉の土器片が集中したり、配石下部から弥生後期土器が出土して、本遺構に帰属する遺物は明らかにしがたい。だが、明らかに本遺構は、敷石住居址より後出するものであり、いーえー3・4グリッドを中心とした縄文中期中葉の土器群が帰属する遺構を崩壊せしめている可能性がある。（林 幸彦 井出 正義）

註1 すでに採土により取り去られたものがあり、プランの推定が正しければ約700~1000個にものぼる量と思われる。



第9図 D 1, 2号土壤実測図 (1:30)

D 1号、D 2号土壤（第9図、図版十の2）  
本遺構は、調査区の北西端に位置するあ・  
いー2グリッドより、2基が連なった状態で  
検出された。

D 1号土壤の平面プランは、東西に拡がった楕円形を呈し、長径105cm、短径65cmを測る。主軸方位はN-87°-Eを示し、確認面からの深さは20cmと浅く、壁は比較的急な傾斜をもって立ち上がり、壁に続いてテラスが東西二カ所に存在し、底面は凹凸のはげしい複雑な様相を呈する。覆土は、焼土、炭化粒子、ロームブロックを少量含んだ黒褐色土によって形成されている。

D 2号土壤の平面プランは、長径70cm、短径65cmでやや南北に長い不整形を呈し、主

軸方位はほぼ北を示す。深さは24cmで、西側の壁際に小さな穴が3ヶ存在し、底面もD 1号土壌と同様、凹凸の複雑な様相を呈す。

覆土は、上部が焼土、炭、ロームブロックを多量に含む茶褐色土で、下部は黒褐色をブロック状に含む黄色土の二層によって形成されていた。

又、両造構の掘り込み面は、炭火粒が入り混った覆土のため、他の面とは様相を異にしており、プラン確認は容易であった。双方の土壌とも人為的堆積であることはほぼ確実であろう。

D 1号土壌からの出土遺物は、覆土上部より、縄文中期土器片1、1.5cm程の後期土器片1と内黒環片1点である。更にD 1号土壌の覆土上部より灰釉の高台部及び土師器片が出土している。縄文土器片は混入したものと考えられ、D 1号土壌は、国分期以降に比定されよう。

しかし、両造構とも、どのような用途をもつ性格の造構なのか不明であるが、同時期に構築されたものであろう。

(島田 恵子)

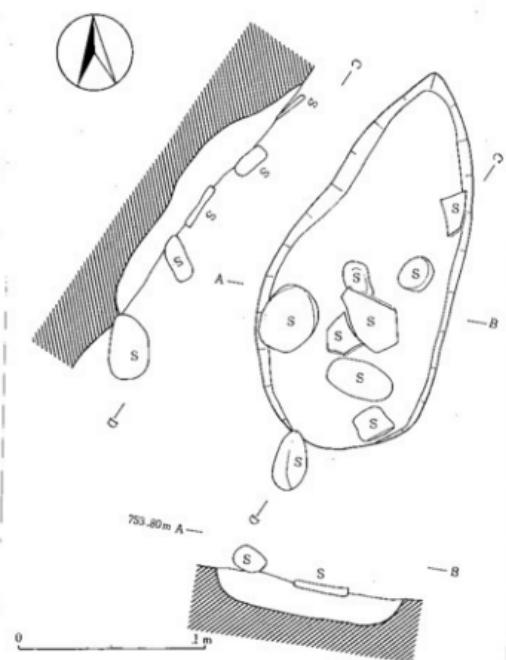
#### D 3号土壌（第10図、図版十一の1）

本造構は、お・かー4グリッドより検出された。

平面プランは、長径210cm、短径100cmで北にすぼまつた楕円形を呈し、主軸方位はN-20°-Eを示す。確認面からの深さは、南北西側5~6cmと浅く、東側は25cmで、この台地上の特徴であるように、西側に傾斜している。全体に浅いのは、発掘前の宅地造成工事によって土を削除したことが原因している。

覆土はローム粒子を含んだ漆黒色土で全体に薄く堆積しており、配石造構の覆土第2層に似ている。

底面の直上際まで、直径35~15cmの安山岩6個、20cmの輝石安山岩（鉄平石）2個が検出されている。



第10図 D 3号土壌実測図 (1:30)

更に北西側に配石群が広がっている。配石造構構築の際に生じたものと思われる。

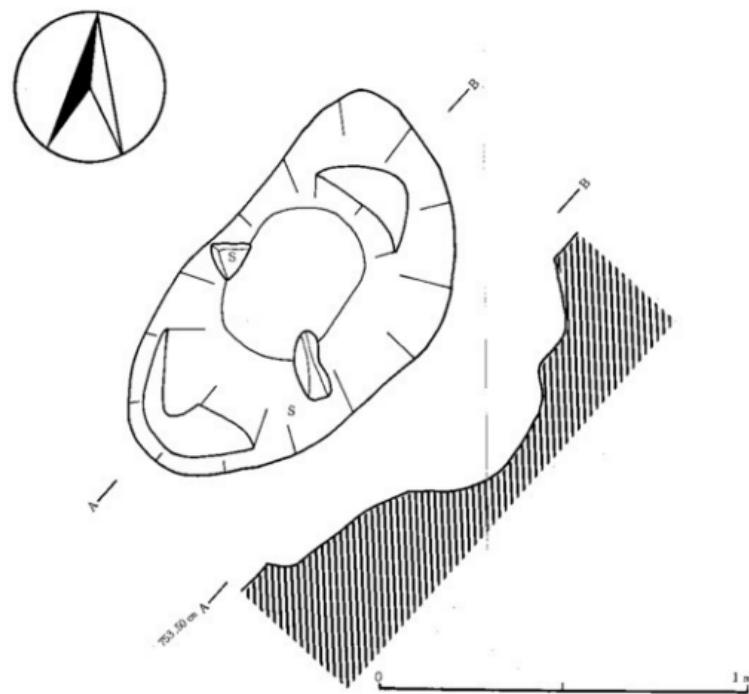
出土遺物は、覆土上部より縄文土器片5点（後期4点、不明1点）が出土している。その他、ロクロ使用による土師器片1点が出土している。これは、重機による採土の際の混入と思われる。

（島田 恵子）

#### D 4号土壙（第11図、図版十一の2）

本造構は、お・かー5グリッドより検出された。平面プランは、長径 240cm、短径 120cmを計測し、ほぼ橢円形を呈す。主軸方位はN-30°-Eを示す。南北両壁沿いには、確認面から11cmを測る位置にテラスが存在する。最底部は確認面より63cmを測る。

東壁の立ち上りに沿って、直徑40cmの安山岩1個が直立ぎみにあり、両側も壁に沿って直徑20cmの輝石安山岩（鉄平石）1個が存在する。配石造構は、本造構の確認面から北東にのびており



第11図 D 4号土壙実測図 (1:30)

これらの石は配石遺構に関係するものと考えられる。又、覆土は、自然堆積とおもわれる黒褐色土によっておおわれていた。よって配石遺構構築以前に存在していたと思われる。

遺物の出土は、皆無であり、本遺構の性格、用途等を決定する所見は得られなかった。(島田 恵子)

#### D 5 号土壙 (第12図、図版十一の2)

本遺構は、D 4 号土壙に隣接した、お・かー 6 グリッドより検出された。

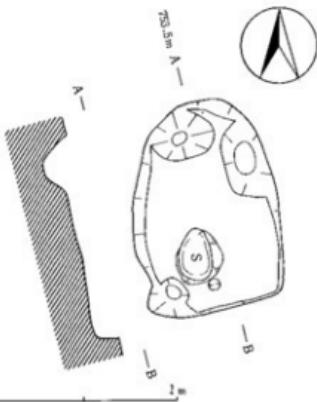
平面プランは、長径115cm、短径80cmを測り不整形の形状を呈す。主軸方位はN-10°-Wを示す。確認面からの深さはきわめて浅く、上面はすでに破壊されており、底面が露出している状態であった。北西壁に沿って凹みが2ヶ所あり、南西側にも1ヶ所の凹みが存在し、底面中央部よりやや低く掘り込まれている。また、南西底面上に直径25cmの安山岩が配置されているが、本遺構上面の掘り込みは、配石遺構構築によって破壊されたものか、又は配石遺構と直接に関係するものかは不明である。

覆土はロームが混入する黒色土であり、配石遺構の覆土第2層に似かよっている。

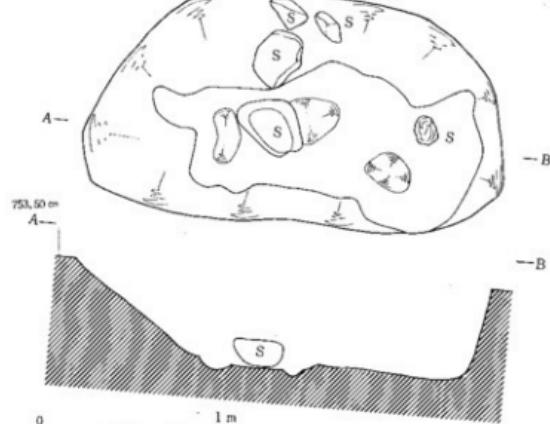
出土遺物は、縄文土器片10点、土師内黒底部片1点、小片で磨滅が著しいため不明な土器片3点、他に炭化材小片が1点出土している。縄文土器片は判明できたものは、後期が最も多い。

(島田 恵子)

#### D 6 号土壙 (第13図、図版十一の2)



第12図 D 5号土壙実測図 (1:30)



第13図 D 6号土壙実測図 (1:30)

だものと思われる。縄文時代中期・後期とも多分に関東地方との関連が強いといえよう。

## 1 縄文時代の遺物

1) 第1群土器〔縄文中期中葉の土器〕(第14・15・19図10・11、図版十五、十七、十八の1)  
いわゆる勝坂式土器である。いずれも小破片であり器形全体を観えない。沈線を主体とするグループ(1類)、竹管文を主体とするグループ(2類)、縄文を主体とするグループ(3類)があり、竹管文を主体とするグループが大半を占める。

### 1類(第14図1~10、第19図10)

第14図1は口縁部内側に下方にむけて若干傾斜し突き出す平坦面を有し(内側に肥厚する口縁部)上部に隆帯によって三角形の区画を設け、隆帯及び沈線によってやや大きめな三角形の区画が下部にも施され、中に三叉文がみられる。2、3は隆帯の上下に沈線が施され、3の下部には一本の曲線がある。4~7は隆帯によって横円状あるいは長方形に区画され弧状、直線的な沈線が施されている。6は特に細かい沈線である。9、10は横走する沈線に直交する数条の沈線がみられる。10は口唇部上面が平坦で内側に肥厚する。第19図10は、底部であり推定底径約13cmを測る。底部付近がふくらむもので隆帯によって区画され区内には蛇行する沈線が施されている。6が黄白色を呈す以外は、すべて黄褐色である。また、ほとんどの破片は、長石・雲母等を含んでいる。器厚は、0.6~1.2cmである。

### 2類(第14図11~31、33~36、第15図1~12)

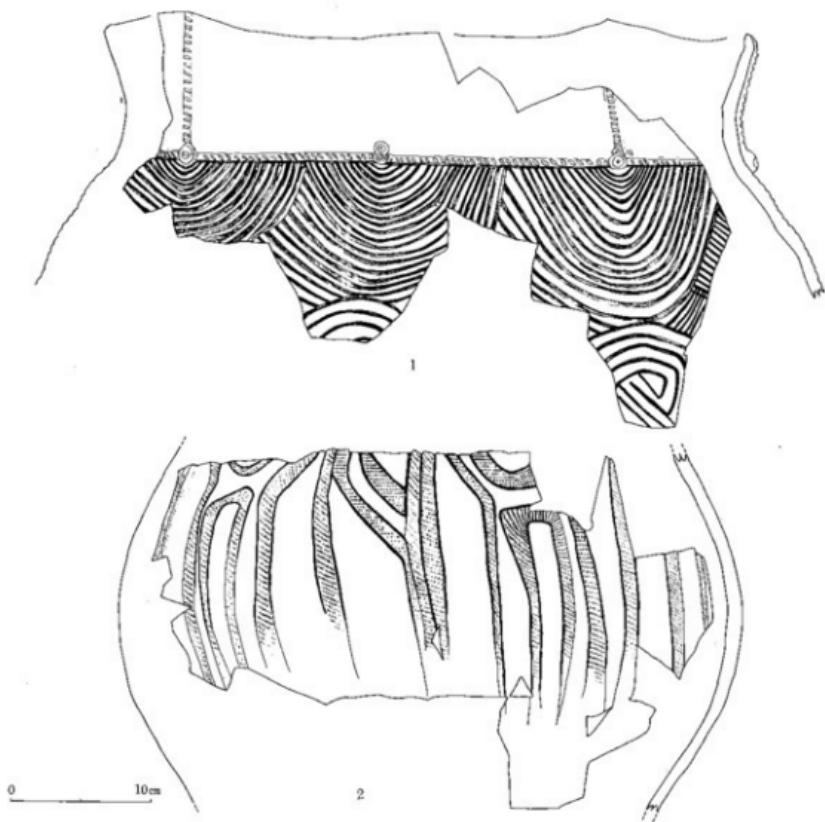
第14図11は、隆帯によって長方形と三角形に区画され隆帯に沿ってΣ状を呈する竹管状工具のキャタピラ文が認められる。長方形の隆帶上四隅には2本の直沈線が添加される。長方形の区画内には蛇行する沈線が縱方向に、三角形の区画内には三叉文が施されている。この三角形の区画は長方形の区画の両側にみられる。これら隆帯で区画された文様帶は數単位をもって器面を一周すると思われ、その上下には、幅約0.2cmの沈線が縱方向に平行に施されている。12は、11と同一個体とも思われ、隆帯とそれに直角な幅約0.2cmの沈線が施されている。11、12とも白色不透明の砂粒を多く含む。13は、三叉文の周囲を竹管状工具によるキャタピラ文がめぐる。14は、11と同一個体と思われる。三角形の隆帯に沿ってΣ状を呈すキャタピラ文が施され区内には三叉文がみられる。15は長方形の隆帯に沿って幅広な竹管状工具によるキャタピラ文が、横方向→縱方向の順に、またその後に横方向の波状沈線が施されている。16は口縁部で口唇部は内側に傾斜する。隆帯に沿って「V」字状の刺突連続が施されている。13~16の胎土中には白色不透明の砂粒を多く含む。17~19は口縁部で同一個体と思われる。口縁部はやや内弯するものと思われ、口唇

部内側に傾斜する。口唇部直下には横方向の竹管状工具による連続爪形文と、それと平行に刺突の連続による沈線がみられる。17・19には三角形状の隆帯と思われるものがみられ、それに沿って竹管状工具でキャタピラ文が施されている。隆帯上には3条の短い沈線が添加されている。20はやや内弯する口縁部で隆帯に沿いキャタピラ文が施され、刺突の連続による沈線の区画も見られ区画内は短い竹管状工具の押引文が施されている。21は、19とはほぼ同様の模様が施されている。22・23・25・26・27・29には、竹管状工具でキャタピラ文が隆帯に沿い施されている。24の無文部は脣上部にあたると思われ、その上方は隆帯と爪形文によって区画され、内部に三叉文の一部がみられる。28は、曲線を描く隆帯に沿って連続の爪形文が、その内側に爪形の押捺が施されている。30は隆帯に沿ってキャタピラ文が施され、そのまわりを断面「V」の連続角押し文がめぐっている。31も30と同様に隆帯と断面「V」の連続角押し文によって区画され、区画内には長短のある幅狭の竹管状工具によって押し引きされている。間隔は広めである。33は隆帯と断面「V」の連続角押し文によって三角形枠が構成され、内部には三叉文が施されている。さらに三叉文内には5個余の刺突がなされている。34は、沈線で三角形状に枠取りし、内側に竹管状工具による連続角押し文が添加されている。35・36は、それぞれ底部付近、底部破片であり、隆帯で梢円形状に区画されている。区画内は、キャタピラ文が施されている。35は左、36は右に無文帯がある。36は、ややふくらみをもって底部に続く。第15図1・2・3は、第14図31と同様な幅狭の竹管状工具によって押し引きされている。1は口縁部で小さな突起が配されている。4は、キャタピラ文とそれに直角に沈線と刻目を添加された隆帯が配されている。4～12は、幅広や曲線・直線の別はあるものの、隆帯に刻目や爪形文を有すものである。5・6は同一個体であろう。幅広の縦方向の隆帯に斜めの刻目が施され、それに沿ってキャタピラ文が添加されている。7は隆帯上に連続する爪形文が施され、さらに波状を呈すと思われる隆帯上に3条の刻目が第14図11・19と同じく添加されている。8は、隆帯に刻目が添加され、周りにキャタピラ文が施され一見草覆虫状である。9は、斜めに隆帯と隆帯の平行な2本の沈線が施されている。10は、隆帯と沈線が横走しており、隆帯には間隔のある刻目が添加されている。大部弯曲している。11・12ともに刻目が添加された隆帯が円を描いている。12は上部が弯曲の傾向を示し、口縁部に移行する部立かと思われる。

以上が第2類である。器厚は1.2cm～1.5cmが大部分を占める。胎土には雲母・長石等を含む。

### 3類（第15図13～19）

13は口縁部であり、RLの繩文が施され竹管状工具により山形と円弧状の沈線が繩文の後に施されている。下方は竹管状工具により円形状に区画されている。14は、13と同様にRLの繩文と



第16図 繩文後期初頭の土器実測図（數石住居址出土）（1：3）

(1) 1類土器 (第16図、第20図1～3、19) 沈線と紐縞文によって文様が構成されるものと磨消縄文が描かれているものがあり、aとbに分類した。第16図1・2、第20図3は數石住居址、第20図19は配石造構覆土より出土した。

1-a 第16図1は口縁部が波状を呈し、口唇部内折気味に立ち上がる。胴上部よりふくらみをもって下部にいたるとおもわれ最大径は胴中央部であろう。復元推定口径は約48cmを測る。くびれに「8」字状の貼付文及び円形の貼付文を伴なう斜位の刻目のある紐線がめぐり、円形の貼付文には斜位の刻目のある紐線が口唇部より垂下する。胴上部には「8」字及び円形の貼付文を中心とした同心円状の沈線が施される。全体的に暗褐色を呈する。第20図1は外反する口縁部で縦位の刻目のある紐線が頸部にめぐり、やや大きめの「8」の字状文が貼布される。一部に黒斑

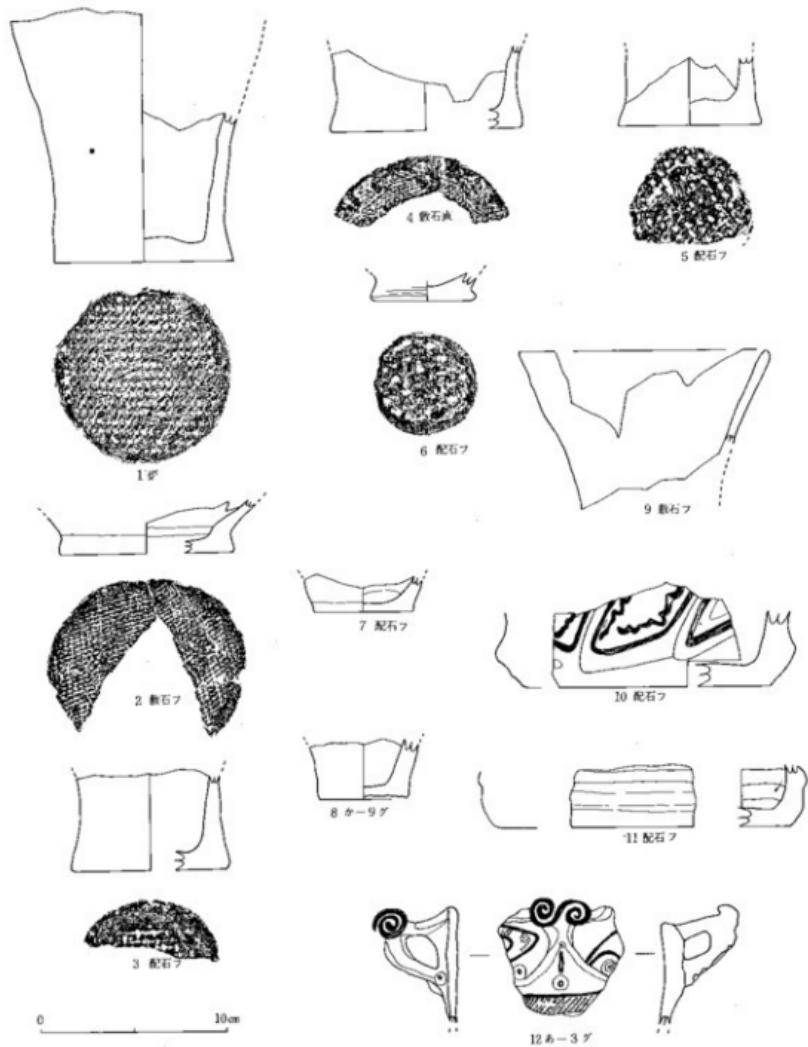
がある。2・3も斜位の刻目のある紐線がめぐり、それよりも上部は無文帶、下部には沈線が弧状に施されている。

1-b 第16図2は胴部が残存しており胴部最大径は約45cmを測る。「U」字沈線と縦位及び斜位の沈線とで区画され、区画内には原体RLの繩文が施されている。全体に暗褐色を呈しややもろい。部分的に研磨されている部分がうかがえる。第20図19はくびれ部に3条の沈線が施されその下には曲線的な沈線で区画され、原体RLの繩文が施された文様帶がある。雲母、長石等を多く含みざらざらしている。

(2) 2類土器 (第17・18・19図9・20図4~18・20~30、21図1~7) 深鉢形土器でありa~eに細分した。

2-a (第17図1、第20図4~8・10~14・30) 刻目が添加され紐線をもつもの。第17図1、第20図8・10・12は敷石住居址、第20図4~7・11・13は配石造構覆土、第20図14かー4グリッド出土である。紐線は横位(4~8、11~14)、斜位(10)、縦位(30)がある。第17図1、第20図4・5は口縁部に横位の紐線をもち胴部に沈線が施される。第17図1は口径約38cmを測り、直線的に口辺部が立ち上る。口唇部は内側にわずか屈折する。全体に薄手のつくりである。口縁部に2条の紐線に縦位の刻目が施され、その上に「8」字文の変形とおもわれる3個の凹みをもった貼付文がある。紐線の下には2条の沈線が横走し、1本乃至は2本の沈線が下方に伸びる渦巻状の沈線を主体とする胴部文様体に連絡する。渦巻状の内部には、直線状の短い沈線が斜位に施される。内外面とも磨かれている。色調は暗褐色で白砂粒を少量含む。第20図4はやや太めの刻目が斜位の紐線で沈線は弧を描き第1類に似る。5~7は円形の刻目の紐線で沈線が平行に施されている。9・7は磨消し繩文の区画としての沈線の可能性がある。いづれも口唇部が内側にひっばられたように内折する。10は波状の口縁をもち、円形の刻目が施された紐線が口縁に沿い斜走する。紐線には「8」字文が貼布される。11~14は1条の紐線をもち胴部に磨消繩文が施される。11の紐線は太めである。すべて原体RLの繩文が施されている。12・13は口唇部が内折する。30は縦位に細い紐線が貼布され、内面口唇部に1条の沈線がめぐる。口唇部には単位は不明であるが、指頭によって内折され一部内側にはみ出した部分がある。外面に黒斑があり非常に薄手である。13を除きすべて内外面よく磨かれている。5・6が黄褐色他は暗褐色を呈す。

2-b (第20図15~18・20) 磨消繩文が主体を占めるもの。15~17は沈線によって区画され、原体RLの繩文が充てんされている。すべてが胴部片である。20は口縁より繩文が施されており、繩文はやや隆帯気味の区画上に施文されている。色調はいづれも黄褐色を呈し、全体にザラザラしている。第20図15・16が敷石住居址、18・20が配石造構、17がウー5グリッド出土。



第19図 繩文中期中葉及び後期初頭土器実測図（敷石住居址、配石遺構、グリッド出土遺物）（1：3）



第20図 繩文後期初頭の土器拓影（数石住居址、配石造構、グリッド出土）（1：3）



第22図 縄文後期初頭の土器実測図（敷石住居址、配石遺構出土）（1：3）

は小形の鉢形の器形とおもわれる。内外面ともに指頭などで非常に粗く調整されており一見手捏ね土器様といえよう。器厚は厚く 0.7cmを測る。内外面ともに粒子が粗いことと調整とも相まって器面が凹凸している。口唇部には内側に指頭で押されており、内側にはみ出す部分がある。第22図2は底径 3.5cm、器高 5.5cm、底径は 4 cmを測り、最大径は胴中央部で 6 cmを測る。口辺部はやや内傾し、胴部はゆるく内湾しつつ底部に続き、底部ではいったんくびれる。外面は研磨されている。口辺部は 2 条の沈線が横走し、間に縄文が施文されている。3・4は杯状を呈し無文である。3は口径 4 cm、器高 5.5cm、底径 4 cmを計測する。4は口径 3.5cm、器高 4.5cmで底部は丸底気味である。3・4ともに内面の凹凸が著しい。いづれも黄褐色を呈す。

#### (6) 網代底について

本遺跡の縄文時代に属するとおもわれる土器底部は全点で18点出土している。その内で半分の9点に網代底がみられる。これらの網代底はなかなか遺存しにくい編物の圧痕であり、古代の織物を知る上で貴重な資料である。したがって、網代底の細部における分析は、編み方の種類、技術、材料を解明するに必要欠くべからずの手順である。しかしながら、本遺跡では当該資料も乏しいためここでは、網代の型式分けにとどめておきたい。

網代の編み方にはA～Cの3種類が認められた。

A： 縦条が2本越え、1本潜り、1本送り、右送り、（第17図2、第19図1・3・5・6）  
の5点。

B： 縦条が2本越え、1本潜り、1本送り、左送り、（第18図2）の1点。

C： 縦条が1本越え、1本潜り、1本送り、右送り、（第19図2・4）の2点

AとBは同種類の編み方であるが、横条が右送りか左送りかの違いであり、文様が左上りか右上りになる。AとBで60%を占める。使用されている材料は巾 0.1cm～ 0.4cmのものである。巾の縦条と横条が異なるものもあり、巾細のものは細長く線状となっている。

本遺跡での「2本越え、1本潜り、1本送り」の編み方が大部を占めるという傾向は、すでに幾多の報文で知られているように「2本越え、2本潜り、1本送り」が西日本のといわれているのに対して、東日本に多く見られるという所見を肯定するものである。網代底については、安孫子氏が神明貝塚で指摘した、網代底は敷物が土器製作過程において施文用具としてでなく、製作用具として意識的に使用したという見解が大勢を占めている。本遺跡出土の第22図1の底部には前述したように網代痕がついた後に高台部が貼りつけられており、土器製作時において編み物が敷かれていたことは明白である。

本遺跡では口辺部から底部が連続している土器の出土は極少であったが、少くとも無文の深鉢

と注口土器は網代底といえよう。

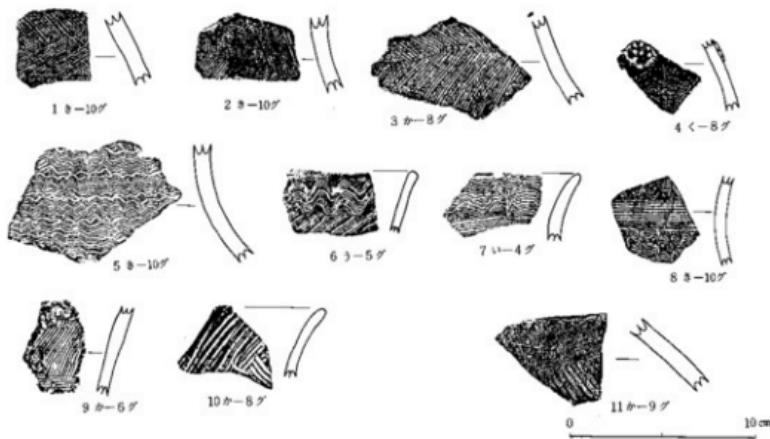
(7) 石器 (第23図1~12・14) 1・11・12・14が敷石住居址より、2がえー3、4がうー3、4がおー4、5がおー3、6がかー4、10がえー3グリッドの配石遺構覆土より、9がきー10、8がおー2グリッドよりそれぞれ出土した。7は表採資料である。

打製石斧は1~5があり、石質は1・3が硬質砂岩、2・5・6が粘板岩、4が凝灰岩である。2はたんねんに縁辺が剥離されており、短櫛形に仕上げられている。6は3cmと分厚く相当な重量があったとおもわれる。1は長さ10cm、巾5.5cm、厚さ1.5cmを測る。2は長さ12cm、巾6cm厚さ2.5cmを測る。7は、粘板岩で一部欠損している。図上部の辺は細く剥離されており、裏面とほぼ直角な面を持ち平坦面となるが、8部の辺は両面とも刃部を作出されており横刃形石器ともいえよう。8~10は剝片であるが、8は図左側辺に細かな剥離が加えられている。9も一部自然面を残してはいるものの左側辺に刃部作出の細い剥離が加えられている。右側辺には刃こぼれ的な剥離がみられる。8・9は黒曜石、10はチャートである。11・12はいづれも砂岩で明らかに縁辺は面をとるために磨り削られている。10はごく僅か欠損しているが、おおむね長方形を呈し、長辺6.5cm短辺5.5cmを計測する。11は両端を欠く、厚さは0.5cmと薄い。2点とも敷石直上より出土しているが、用途不明の石製品である。14は硅質粘板岩製の石剣である。柄部とその近辺を欠損する。敷石住居址の東部床面より出土した。最大径は2cmを測り現存長は17.5cmである。全体によく磨かれている。

## 2 弥生時代の遺物

すべて弥生時代後期の土器が出土している。(第24図1~5、第25図1~10) 第24図1・2はいー4グリッド、第24図3はかー9、4はきー12、5はきー10グリッド、第25図6はいー4、7はうー5グリッドより、1~5、7~10はか・きー9・10グリッドより出土した。か・きー9~12グリッドの凝灰質角礫岩の直上(全体属序第Ⅳ層)からは、多くの弥生式土器片が出土しているがほとんど磨滅しており、第Ⅲ章の層序でも述べたように他所から流れ移動したものと思われる。

第24図1は口縁部を欠損する壺形土器である。器高は残存部41.5cm、底径10.5cm 最大径は胴下部にあると思われ26.0cmを測る。外反する口辺部をもち、胴部はゆるく曲線を描き胴下部の変曲部まで続く、以下は底部からやや外反気味に変曲部まで伸びている。底部は1.5cmと分厚いが胴部から口辺部は約0.8cmである。外面は全体に平滑化されているが、箱清水式にみられる丁寧な研磨はみられず、斜方向の間隔あるミガキとその後の縱方向のミガキが重複してみられる。頸部には綾杉となる櫛描文とその上部に1単位11本の簾状文が施されている。外面には赤色塗彩は



第25図 弥生後期及び須恵器の土器拓影（グリッド、D 1号土壙出土）（1：3）

みられず、内面の器面は口辺部を除きザラザラしている。特に底部は剥落が著しい。頸部の文様は1単位11本の工具を用いて簾状文が右から左へと施されている。4～5cmごとにおさえ、縦の連続する刻み目が現れており、0.6～0.7cm間隔で2条づつある。その下には同様な工具で2段の平行沈線を引いている。上下段の方向は逆といわゆる「綾杉文」を呈している。上段の巾は1.5cm、下段は2cmを測る。これらの施文順序は、簾状文→綾杉文の順である。第25図1～3も同様な壺形土器の頸部片をおもわれ、それぞれ綾杉文が施されている。第24図2は高杯形土器であるが脚部を欠く。口径26cm、壺部の高さ12cmを計測する。壺部は接合部よりほぼ直線的に外へ開き口縁部は大きく開き一見平坦のようにみえる。壺部と脚部との接合に用いたと思われるホゾが残っている。第25図5～10は壺形土器片であろう。6・7は口辺部であり、6は重複がほとんどない丁寧な櫛描波状文が施されている。7・8は簾状文をはさんで上下に波状文がみられる。10は櫛描条痕的な文様をもつ口縁部である。第24図3～5は壺か壺形土器の底部とおもわれる。

これらの弥生式土器は、頸部に「T」字文がなく綾杉文が主体を占め、壺形土器に塗彩がない。又、壺形土器の波状文が丁寧に施されており重複があまりないといった特徴等から、箱清水式というよりむしろ後期初頭の吉田式に併行するものとおもわれる。

遺跡の特色であり、その分布範囲内に敷石遺構が存在することが想定されている。その数は相当なものといわれている。

佐久地方において敷石住居址の発見されている遺跡は、小諸市下笹沢、郷土川辺、望月町下吹上の縄文時代中期、軽井沢町茂沢、御代田町宮平、小諸市加増などの縄文時代後期のものがある。しかしながら、調査の十分な遺跡は極少のため本地方における比較検討・統計的分析等はなし得ないのが現状である。

敷石住居址の実体解明にあたっては、今後さらに時間的・空間的、住居内の施設・出土遺物等の分析を進めなければならぬであろう。本遺跡の敷石住居址の諸状況は従来の説（3）非住居説は否定するものであり、（1）・（2）については今後の課題としたい。

敷石住居址の検出もさることながら、弥生時代後期の南限を発掘調査によって得られたことは重要である。遺構の検出はされなかったが、佐久西小学校方面からの多量な土器の流れは、本遺跡の上方の段丘に位置する佐久西小学校裏跡に相当規模な埋藏を意味するものである。

このように本遺跡及び対岸の館遺跡とを結ぶ一帯は、佐久地方において千曲川流域の地形が、山間部と平坦部との境をなすことと相通じて古代の文化的特徴にもその接点的役割をもつものである。特に館遺跡や中原遺跡出土の弥生時代中期の土器をもつ文化伝播経路が、千曲川上流を通過のか、八ヶ岳連峰の北を通のか、秩父山系を越すものなのか等の問題点は、佐久平に稻作が定着しようとする時期の重要な点である。また、古墳が築造された地域の佐久地方における南限であり、集落等との関連も今後の研究の課題であろう。

（林 幸彦・土屋 長久・井出 正義）



2 宮の本遺跡近景(北方より)

図版二  
遺跡全景



2 宮の本遺跡全景(西方より)

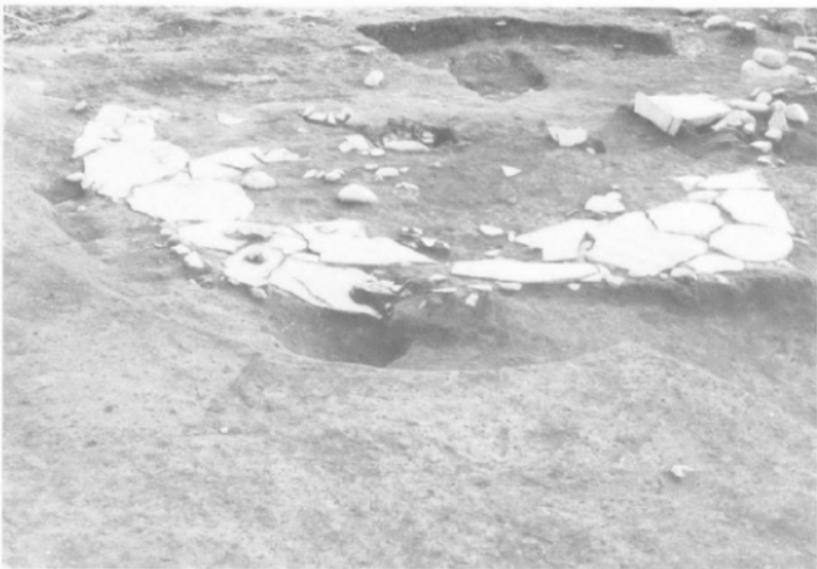


1 宮の本遺跡層断面(南方より)



2 全体層序第1層の礫(西方より)

図版四  
遺構



1 敷石住居址全景(東方より)



2 敷石住居址全景(北方より)



1 敷石住居址 炉(上方より)



2 敷石住居址 炉(上方より)



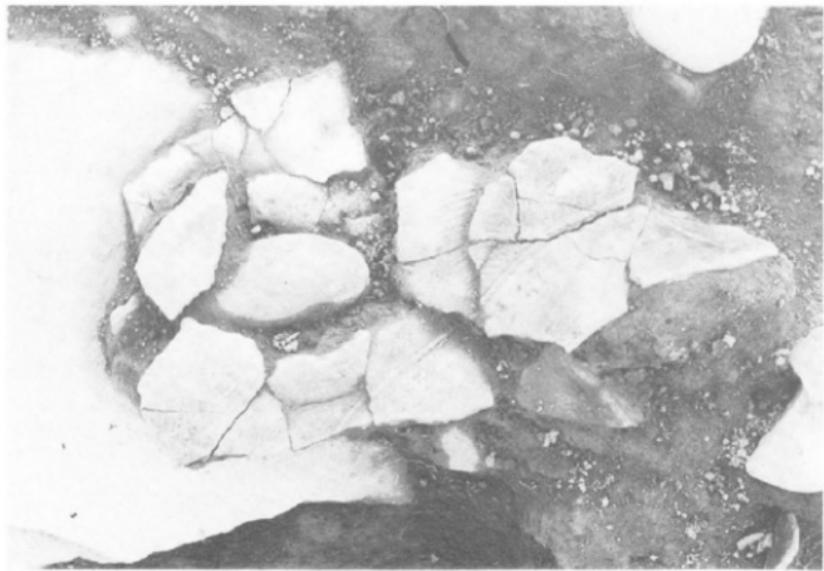
1 敷石住居址北東部の遺物出土状態(南方より)



2 敷石住居址北東部の遺物出土状態(東方より)



1 敷石住居址 注口土器出土状態(北方より)



2 敷石住居址 深鉢土器出土状態(上方より)

図版八

遺構



1 配石全景(西方より)



2 配石全景(南方より)



3 配石全景(東方より)



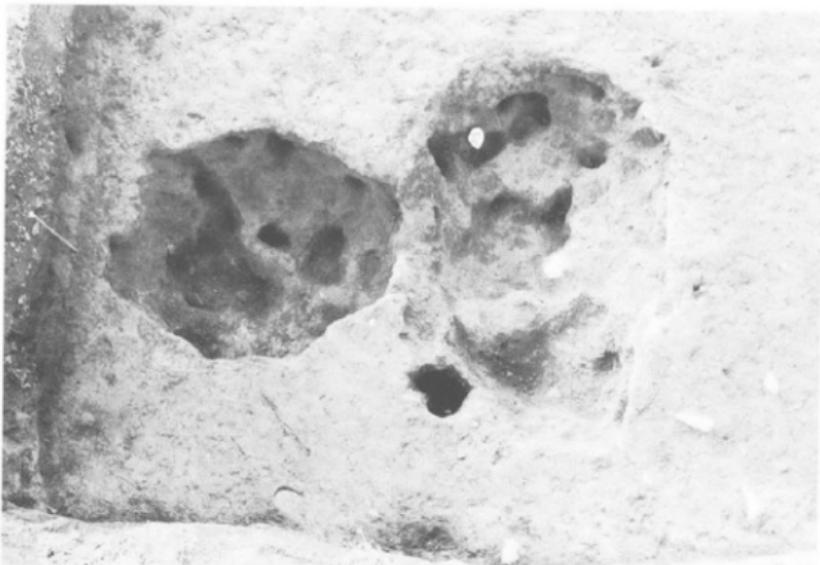
1 配石 階段状組石部(西方より)



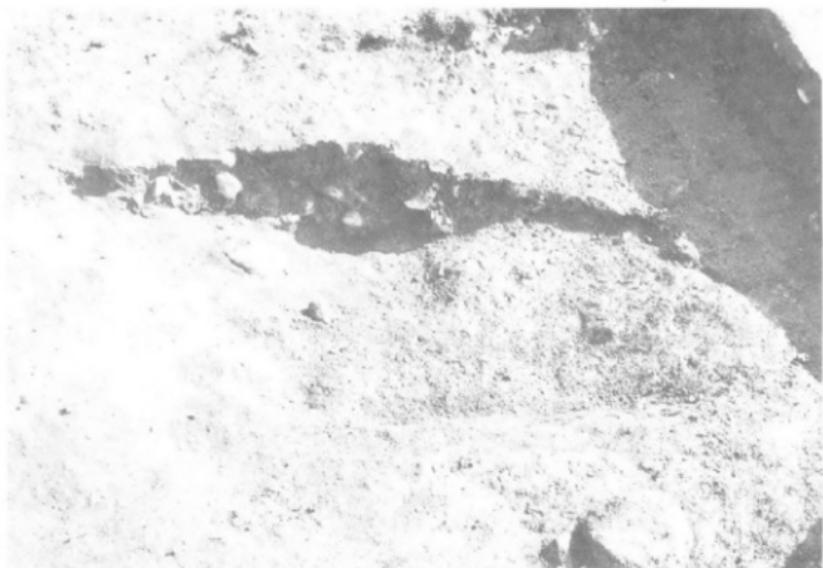
2 配石 階段状組石部(南方より)



1 配石断面(南方より)



2 D1号土塹全景及D2号全景

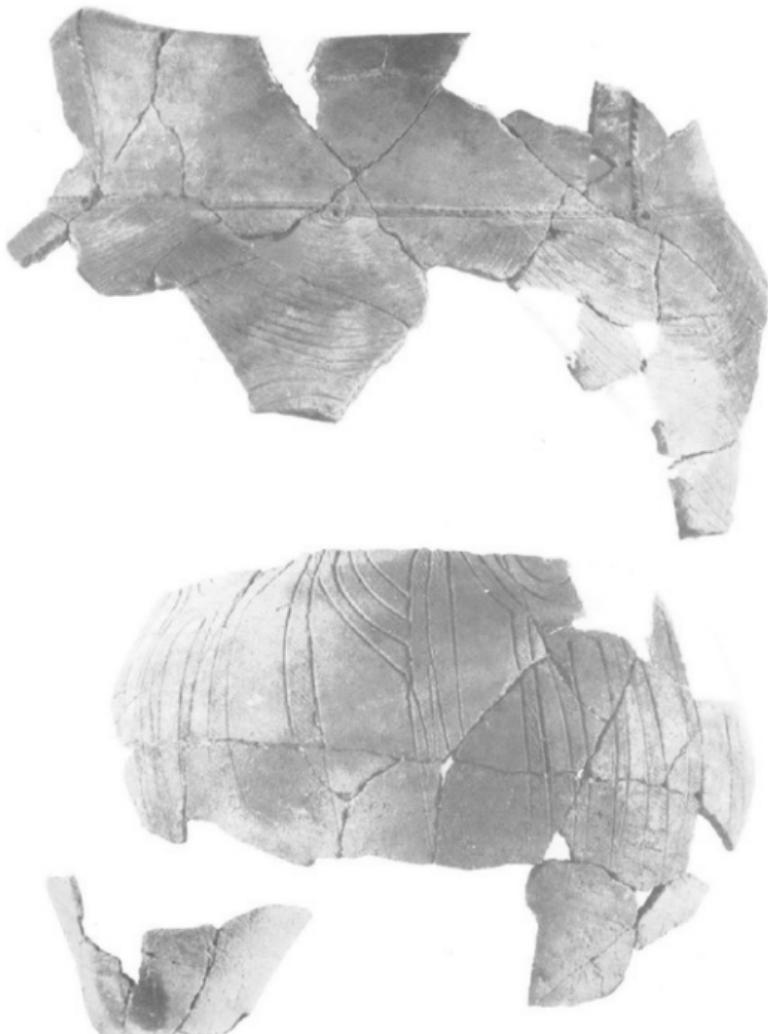


1 D3号土塁全景(北方より)



2 D4、5、6号全量(南東方より)

図版十二 出土遺物



敷石住居址出土遺物

図版十三 出土遺物



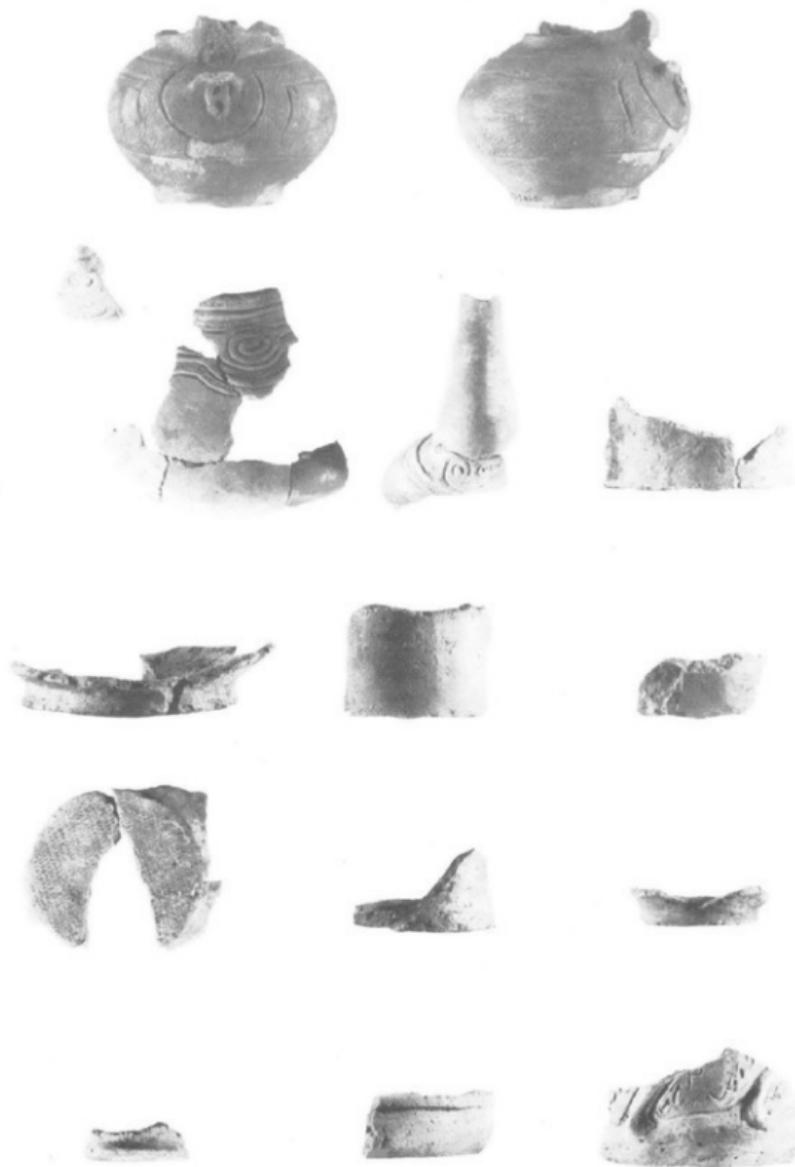
敷石住居址出土遺物

図版十四 出土遺物



敷石住居址 及び配石造構出土遺物

図版十五 出土遺物



敷石住居址及び配石遺構出土遺物

図版十六 出土遺物



グリッド出土遺物

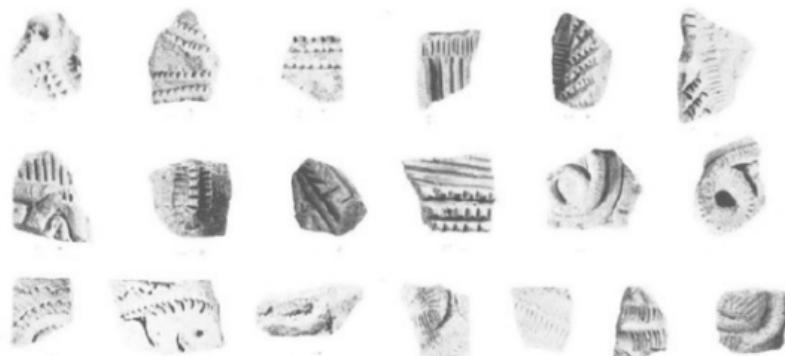
図版十七 出土遺物



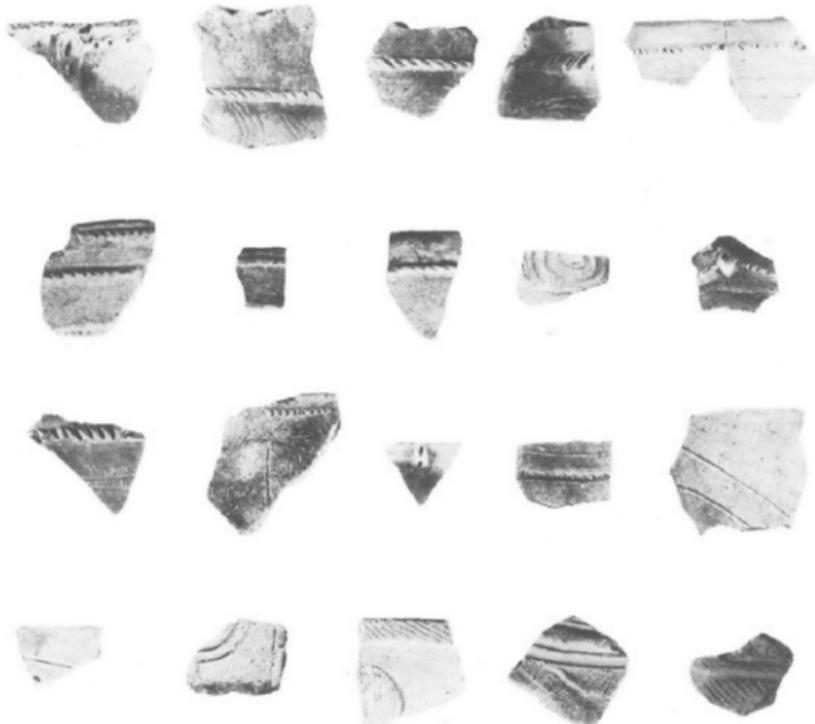
縄文中期中葉の上器

図版十八

出土遺物



1 縄文中期中葉の土器



2 縄文後期初頭の土器

図版十九 出土遺物



捲文後期初頭、弥生後期、平安時代の土器

図版二十 出土遺物及びスナップ



1 敷石住居址、配石遺構、表採の石器



2 宮の本遺跡発掘調査スナップ

図版二十一 発掘調査スナップ



宮の本遺跡発掘調査スナップ

図版二十二 スナップ



宮の本遺跡発掘調査スナップ

宮の本遺跡

長野県佐久町宮の本遺跡発掘調査報告書

発行日 昭和54年3月

発行者 長野県南佐久郡佐久町高野町

佐久町教育委員会

編集 宮の本遺跡調査団

印刷所 佐久印刷株式会社

